



みらいのおすすめ

- チッ素成分のすべてがアミノ酸
- だから生育が早く飛躍的な効きめ
- サシ芽から花肥まで使え、生育遅れの挽回や追い込みなどに卓越した効果

**優秀花をめざすなら、乾燥肥料は発酵熟成したもの
液肥はアミノ酸を多く含んだもの それ以外の選択肢はない！！**

肥料の選び方、使い方以前に知っておきたいこと

培養土が正しく作られていないと、肥料の効果は生育に正常に反映されません。

そのよい例が腐葉土づくり時での米ヌカの入れ過ぎや培養土への乾燥肥料の入れ過ぎです。

肥料濃度が高くなり過ぎ根の発達を阻害し根張不良の原因となります。

その結果、葉が小さく、葉肉が異状に厚くドス黒くなり、肥料濃度障害の発生となります。

根張り不良は根毛部分が根いたみ状態となる為、リン酸とカリの吸収をいちじるしく低下させ、チッ素過剰を助長させます。

また、濃度障害には至らなくても、「生育が悪くなる」「葉色が異状に濃くなる」、「タレ下がる」、「巻き込む」などのチッ素過剰の状態となり、アレコレ肥料を変えても

改善には至らない場合がほとんどです。

培養土づくりの失敗は肥料の選び方や使い方を大きくくわせ、修正の方向性を見失い、毎年同じような失敗をくり返すこととなります。

培養土づくりの失敗はあまりにも大きく、肥料の選び方や使い方の間違いにより現れるいろいろな症状を見えなくしてしまいます。

その結果、「肥料なんて何を使ってもかわらない」など間違った結論に導くこととなります。

この原因は肥料の入れ過ぎやチッ素過多の培養土づくりにあります。

土が正常にできていれば肥料の使い分けによる生育の違いが見えるのが普通です。

培養土づくりを振り返る 腐葉土づくりで米ヌカを入れ過ぎた??

培養土を配合する時、乾燥肥料を添加した??

いずれも肥料濃度が高まることが問題です。「小鉢上げ時に芽先が枯れる」「根張り不良による生育不良」が起きる可能性が大です。

ベニヤ板を半分に切り発酵槽を作ると踏み込んで約700リットル落葉が入ります。

腐葉土に完成すると約400リットルになると思います。これで培養土を作ると約800リットル、9号鉢80鉢分くらいになります。

米ヌカ添加量が20リットル(7kg~8kg)程度なら心配はないと思います。

よくある話で、米ヌカを1本約40リットル(15kg)を入れた。余らせてもしょうがないと思ってさらに残っている半分(20リットル)を入れた。ここまで入れると問題が起こる可能性が大きい。

この場合は米ヌカ35kgくらい入ってしまい9号鉢1鉢当たり400グラム入れた計算になります。(チッ素4%の乾燥肥料に換算すると約200グラム)心配ないレベルは約100グラム以下と考えます。

さらに培養土に配合する時、乾燥肥料を入れる方がいますが、入れ過ぎれば肥料過多になりこれだけでも苗の芽先が枯れ込む場合があります。

最悪のケースは避けられても肥料濃度が高過ぎ初期生育が非常に悪く生育が遅れてしまうこととなります。

—— 腐葉土づくりから培養土づくりに至る作業内容はよく確認をしておく必要があります。——

対策

このようにして作られた培養土は使用しないことが最善ですが、他に培養土がない場合は9号鉢等に培養土を入れエヌツールで肥料除去をした後に、使用することがよいと思います。

(救済措置として)



チッ素過剰の生育、花弁の伸びも不充分